釧路市立北中学校「学校だより」

北　魂

令和６年（2024年）１月22日発行　VOL 43

「分からない」と言える大切さ

釧路市立北中学校長　冨　田　直　樹

３学期が始まって２週目に入ります。18日から各学年・学級で通常の授業が始まりました。冬季休業明けですが、どの学級でも「自走する生徒を教師が伴走する」、そんなスタイルで生徒と教員が授業を創り上げています。第３学年にとっては、教科書を活用した授業は今月を目途に終了し、中学校における授業も残りわずかです。１時間、１時間を大切にしてほしいと思います。

さて、昨年度勤務していた小学校で、第５学年の算数の授業を参観していました。三角形の面積についての学習でした。教員が児童に問題を提示し、「この問題、分からない人？」と尋ね、分からない児童に手を挙げるように求めました。すると、何人かの児童が「はい！」と元気よく手を挙げました。その後、その教員が「どこが分からないの？」と聞きながら授業が進んでいきました。

私がこれまで参観してきた授業において、「この問題、分かった人？」と尋ねる場面がほとんどであり、それが普通だと感じていました。「この問題、分からない人？」と尋ねた教員の意図に興味があったので、授業の後、当該の教員に質問してみました。

当該の教員は次のように教えてくれました。

「『分からないと思う』のは、一人で悩んでいるだけで、そういう場合、えてして思考は進まないと思います。一方、『分からないと言える』ことは、誰かに今のネガティブな状況を伝えられたことを意味します。誰かに言えることで、聞いてくれた相手とのやり取りが生まれますよね。そして、相手との対話の中で、既習事項の内容を思い出したり、新たな気付きが生まれたりして、思考が動き出すのだと思います」

とても納得しました。その授業は、児童が「分からない」と言えることで、教員や友達との対話が進み、そこから「分かる」プロセスに繋がっていく、そこがとても興味深かったことを覚えています。そして、児童たちもきっと、このプロセスを実感していたのだと思います。だから「分からない」と手を挙げることができたのだと思います。

「できない」ことを言えたときに「できる」ようになっていく現象は、小学校の第５学年の算数の授業に限ったことではありません。本校の授業をはじめ教育活動全般についても同様です。「分からない人いますか？」と教師が問い掛ける、それに対して「分かりません」と生徒が対応し、複数で対話が始まり、最終的に「わかっていく」、そんな場面がたくさん生まれてくればと思います。そして、このことは生徒と教師の間だけではなく、教師同士、教師と保護者、地域の皆さんの間にも成り立つと思います。

学校には複雑な課題が山積しています。「解決できない」と言えたとき、対話が動き出します。「できないと思う」と「できないと言える」との違いを皆さんと共有できたらと思います。そして、「できない」「分からない」と言えることの大切さを実感したいですね。